

言葉に魂を込めた悲劇の民族詩人サイチンガの肖像  
(交感するアジアと日本)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ボルジギン, オルトナスト メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00008107">https://doi.org/10.14945/00008107</a>

# 言葉に魂を込めた悲劇の民族詩人サイチングの肖像

ボルジギン・オルトナスト

## 目次

- はじめに
- 1 詩人サイチングの日本体験
- 2 モンゴル文壇における位置づけ
- 3 不遇の晩年
- おわりに

## はじめに

サイチング（1914-1973。ナ・サインチョクトともいう）とは、中国の東北部で満洲国が成立し、内モンゴルが日本の支配下に置かれたモンゴル人の独立政権のモンゴル聯合自治政府の時代、官費留学生として日本へ留学し、日本の教育を受けて帰国後は政治的、文化的に混乱に陥っていた内モンゴルの近代教育、近代文学の発展の表舞台に立ち身を降さず、志を辱めず心血を注いだ著名な詩人である。

内モンゴルの近代の歴史、社会史、教育史などは日本を抜きにして語るができないのは周知の事実である。内モンゴルの近代文学史も同様である。しかし、サイチングが活躍していた時代は国際情勢が不透明で、内モンゴルの政治、社会、文化は暗澹極まる状況に置かれていた時代であった。

2014年、内モンゴルの現代教育と現代文学の創始者、啓蒙者、国民的詩人サイチング生誕100周年を迎えた。この一年は北京を始め、内モンゴルではサイチングゆかりの地で学術会議、記念集いなどが盛んに行われた。モンゴル国でも関連集いが行われた。サイチングの思想と文学を偲ぶこれらの集いは、彼のモンゴルの現代文学の発展に及ぼした影響の大きさを物語るものである。彼は青春時代、日本とモンゴル国へ留学したため、その近代的経験、思想形成、文学的成就には日本の近代教育、近代文学の与えた影響は計り知れないものである。しかし、サイチングの日本へ留学することになった政治的背景、帰国したいきさつと、彼の日本で活動した足取りなどに関して不明な点が多く残されている。本稿は、サイチングの日本体験とその後の内モンゴルの近代文学に及ぼした影響とその晩年の不遇について考察を試みるものである。

## 1 詩人サイチングの日本体験

1930年代内モンゴルはほぼ日本の支配下に入った。日本の内モンゴル支配が確立された後は、産業開発に呼応する形で留学生に対して専門技術の習得を求める傾向が強まった。モンゴルの社会に対して徳王（1902-1966）は、知識青年の力量を利用して近代的変革を達成しようとした。一方、知識青年たちは蒙古民衆の脆弱さを問題視しており、改善策に近代的知識の導入、教育の普及を重視したのである。近代的知識を日本など海外に求め、青年自らの留学を希望した。こうした徳王と知識青年の思惑が合致し、日本への留学生派遣が開始され、徳王と日本の「協力関係」もこれを契機に始まったのである〔田中 2001: 131〕。このような政治的背景のもと、サイチングは1936年、張家口にある張北モンゴル青年学校に入り、日本語を学ぶ。ここで、歴史と文学に関する書籍を多く読み、知識欲を満たしていた。1937年4月日本へ派遣する試験に合格し、当時の内モンゴル独立運動指導者徳王の官費留学生として東京善隣高等商業学校に留学した。1938年、東洋大学専門部倫理教育科に進学し、教育学を専攻する。彼は内モンゴルの近代文化史において、日本へ留学した経験を持つ方の中でもっとも影響力をもつ人物の一人となった。そのため彼の「日本体験」と「日本観」を知ることは、同人の文学世界を正確に理解する上で必要不可欠な事柄である。

青年サイチングにとって日本への留学は、正しく青雲の志を抱いての留学であった。しかし、彼の日本での足取りを記した資料が乏しいのも現状である。彼は日本の土に足を踏み入れてから3ヶ月後、つまり1937年の7月の夏休みに学校の同窓たちと一緒に東京から静岡県にある清見寺で一ヶ月間の訓練に参加した。この見学活動は当時の日本の留学生教育事業の一環として「毎年7月に伊豆近辺、富士山麓で行われる夏季訓練では、在校蒙古学生だけではなく、上級学校進学者も参加して、日本語、英語、数学教育と水泳が実施された」〔田中 2001: 120〕プログラムの一つである。その時の見聞と体験を彼は「清見寺における生活」という手短い紀行文で纏め、『善隣協会調査月報』の66号に掲載された。その一文は彼の日本へ留学してから日本語で書いた最初の作品であると考えられている。この一文を丹念に読み解いていくと、そこに彼の日本の自然と文化、歴史に対する観念が見事に織り込まれていることが浮かんでくる。その文章におけるいくつかの内容を下記のように引用し、彼の「日本体験」と「日本観」について追って見たい。

前には処々に白い波頭漁蓑のやうに立って黄金のやうに輝いている夏の海と、後には、満山を緑したたる青葉に爽やかな風が渡っているの見る。又森林に霧が晴れたり掛かったりして濃緑の色に包まれているのが見える〔賽春嘆

1937: 119]。

ここでは、黄金のように波を打って輝く日本の夏の海と森の印象が描写されている。海と森を観た体験である。この体験は後に彼の創作世界に独特なモチーフとなっていくのである。「日本歴史に有名な清見寺に参りましたところ、折から歓迎の為打ち上げられた花火や、寺の門前に睦まじく立てられた日蒙滿三国旗には言ひ知れぬ好感と親しみを抱いたのであった」[賽春嘎 1937: 119]。ここでは、清見寺の門前に当時の日本とモンゴル、満洲国という言った三カ国の国旗が掲揚されていて、そこに青年サイチンガは、「言い知れない好感と親しみを感じていた」心情を書いている。この内容はまた当時の複雑な国際関係、政治背景を物語る貴重な記録として研究に値する。「1933年夏、徳王は知識青年と一部の革新的王侯を集結し、蒙古の自決・自治によって「自救救国」をはかるとして自治運動を始動した。徳王らの高度自治要求は、国民政府に衝撃を与え、双方折衝の結果、1934年4月、百靈廟に蒙古地方自治政務委員会（蒙政会）を成立させた。その蒙政会は1934年度自治実施計画で、まず各盟旗に師範学校・初級学校を設けて教育事業の基礎を確立し、次いで毛織工場等を設立して産業を開発する政策を打ち出した。教育事業は、実業教育・軍事教育・政治教育を中核とした。この三教育を柱とする教育重視の方針は、民衆社会に対する運動参加者の認識が反映した結果である」[田中 2001: 102]。モンゴルの情勢をめぐるこのような複雑な事情はすでに青年サイチンガの胸に焼き付いて燻っていたため、突然並んで靡く日本、満洲、モンゴルの国旗を見上げて、「言い知れぬ好感と親しみを抱く」ことも当然の成り行きであり、望外の体験であったと言えよう。

「其処の気候を東京に比べて見ると、殆ど昼は焦げつく様に暑く、夜は人を誘惑する様に生温い南洋から、清涼国にでも来た様に気持ちよくなりました」[賽春嘎 1937: 119]。ここでは、青年サイチンガは、日本の気候にも非常に親しみをもっていた体感が伝わってくる。「其の晩御寺の老師並びに日本学生及び私達皆本堂に集合して、老師が初めに日本学生と蒙古学生を御紹介して下さいました後、色々の慈恵な、又は親愛なる御話をなさって下さいました。それから毎日四時に起きまして仏殿に、老師並びに小僧と共に御経を拝読して、又は老師から精神修養の方面から色々の御指導を受けました」[賽春嘎 1937: 119-120]。この内容は、サイチンガは何故作家人生を歩み、文学に成功したのかを知る上で、極めて重要な箇所である。彼は日本の仏殿で、老僧に精神修養の指導を受けたことが、後の文学的成功に大きな影響を与えものと思われる。

午前九時になると、私達は名高い東海の清見瀉の岸に着いて、衣服を脱捨てて皆面白く語らいながら入りました。さうして私は胸を躍らせながら下を見下

ろした。生き生きした限りなく広い青い海の姿が私の眼に映った。一度も海水浴した事のない私は恐ろしくなりましたが自ら勇敢して両手を高くさし上げて、丈一ぱい体を伸ばして、静かに頭から海水に入りました〔賽春嘎 1937: 120〕。

上の箇所では、海の無いモンゴルの草原で育った青年が初めて、日本の海に入るときの緊張感とその体験が綴られている。しかし、サイチンガにとっての海はただの海ではなく、文化の深さを肌で感じる精神の海であった。この時の体験が後に「穏やかな海辺」(1941) という詩となり、サイチンガの詩の世界に実を結んでいることから分かる。「八月三日、私達全部白砂青松を敷いて、清澄な清水港が包まれた三保の松原に行って天然の景色を遊覧」〔賽春嘎 1937: 120〕。ここでは、日本の三大自然景色の一つであり、2013年世界自然文化遺産にも登録された三保の松原での見学が綴られている。「明治維新当時の有名な人物井上公爵の御住みになって居った古今内外の非凡な様式を模倣し建築した別邸と英壮な元勳井上馨侯の銅像を見物した」〔賽春嘎 1937: 120〕。この箇所では、日本へ留学して三四ヶ月しか経っていない若いサイチンガが「明治維新」という言葉を述べていることが非常に注目に値する。つまりサイチンガは、日本に着くや否や日本の近代文化の勉強と理解に並々ならぬ情熱と努力を注いでいたことを示すものである。

十四日、山岳部部长、町田先生並びに篠田先生と本部の部員達と浜石岳に登るべく出発、麓で下車してあの種々の木々のくねった、細い幹が互いに交じり、木深く叢立って、梢が密に掩茂った。枝の高い新鮮な鋭い香が漂っている森蔭に、日或いは蒙の少年が青春の歌を歌いながら登りましたが、何時の間にか頂上まで踏破していた〔賽春嘎 1937: 120〕。

上の箇所では、青年サイチンガは鼻歌を歌いながら、森林に覆われ、新鮮な香を漂わせる浜石岳に登った体験が綴られている。馬に乗って草原を疾駆させるモンゴル人には、山に登るという習慣は殆どないため、この体験はサイチンガにとって、精神を鍛えるという得難き体験となっただろう。「十八日、そこから午後二時に海岸に崛起した山上の快濶、尚荘厳華麗な風景の明媚と相俟って日本屈指の名勝なる久能山東照宮に参拝して、四時に清見寺に帰りました」〔賽春嘎 1937: 120〕。このように、サイチンガたちが日本屈指の名勝である久能山東照宮に参拝したことが示されている。日本の自然は美しかった。その時の体験は、サイチンガの故郷への記憶を甦られせ、「故郷」(1941) というモンゴル語による長編叙事詩を書きあげ、東京で出版することに繋がったのである。見学と遠足は留学生が日本を知る上でもっとも貴重な体験である。

上記のように、サイチングの「日本体験」と「日本観」を考察する際、彼が日本に着いて間もない頃にした「清見寺における生活」という日記式の紀行文が非常に重要な資料となることが分かる。そしてこの清見寺で過ごしたこの一ヶ月間の訓練とその体験が後のサイチングの思想形成、文学への情熱を成熟させる導線となり、詩境を極める原動力となったと考えられる。1941年にサイチングは東京で謄写版で『心の友』〔トゥブチュド・バイガル 2014: 1-88〕というモンゴル語の詩集を出した。これには「自然の公園であり文化の殿堂と化した日本」という一内容があり、「富士山は美しい」と「東京」、「山寺山」、「夢の松島」、「利根川の記憶」という日本をイメージした五篇の詩を書いていた。これらの詩篇は彼の「日本体験」と「日本観」を端的に示す証拠として考察に値する。これらの詩篇はまた、明治維新で西洋の政治体制、文化制度を取り入れ、アジア初の近代国家を成し遂げた当時の日本の投影でもある。彼は日本の自然をこよなく愛し、感銘を受け、自分の詩道を探求してきた詩人である。「自然の公園のような国日本」という表現からも、サイチングの「日本観」が如実に伝わってくる。上記の『心の友』というモンゴル語の詩集に収録されている「富士山は美しい」という一篇の詩を下記のように日本語に訳すを試みる。

#### 富士山は美しい

サイチング 著

ボルジギン・オルトナスト 訳

瑞雪をもって霊峰を飾り立て  
妖艶な眺めで世界を魅了する  
一億民の心の美観となり輝き  
未練がましき富士山は美しい。

天頂は雲と靄の間にそびえ立ち  
麓に連なる尾根伝いを見下ろす  
四海は波静かにて風の音が薫り  
無数の登山客の目指す処と成す。

そそり立ついわおは空中に冴え  
かみなりもその胸元に響き渡る  
常しえの白き衣に身をこしらえ  
山々のライオン富士山は美しい〔トゥブチュド・バイガル 2014: 3-4〕。

この詩の構成と言葉の技法から見ても「素晴らしい」という一言に尽きる。というのは、この詩は東西の詩法、写実と想像を巧みに融合させた傑作となったからである。詩の最後の一行に見える「ライオン」という表現は、モンゴルの英雄叙事詩における英雄達に捧げる最高の聖なる称号である。その聖なる称号を富士山に冠して「山々のライオン富士山は美しい」と讃え、富士山の無比の地位を強調し、聖なる靈山であることを限りなく賛美したことは、詩人特有の心の哲学であり、彼が並外れた詩人であることを示す証左でもある。

富士山は日本の文化の山であり、詩歌の山であり、絵画の山であり、信仰の山であり、芸術の山でもある。詩人を志す者は、富士山について詩を書いてこそ初めて詩人の仲間入りを果たすものである。このことをサイチンガも熟知していた。詩人サイチンガの予言通り、世界中の人々に愛され、敬慕され、「一億民の心の美観となり輝き」、「山々のライオン」となり続けてきた富士山は2013年6月、終に「富士山—信仰の対象と芸術の源泉」という名で世界文化遺産に登録された。東京でモンゴル語による詩が出版されてから72年後の快挙でもある。この一篇の詩に、自然を透明な眼差しで見続けるというサイチンガの詩人としての風格が甦る。彼は日本の自然から受け取ったインスピレーションと日本で磨ききった詩魂をそのままモンゴルの大草原に持ち帰り、内モンゴルの近代詩、近代文学の黎明を拓いた先駆者となり、モンゴル族の精神世界の豊穡に魂魄を注ぎ続けた。

サイチンガは日本留学中に社会活動にも積極的に携わっていた。それは当時日本留学中のモンゴル人学生を纏め、自発的に留日モンゴル人学生修養会を組織したことにも見える。1940年7月8日に東京で発会式が行われ、サイチンガは5人の幹事の一人に選出された。そしてサイチンガの起草によって40数項の規約が定められ、採択されている。その主なものには、①校則、寮則を遵守する、②政府の監督者、学校、学寮の指導者を尊敬し、その訓言に服従する、③日本の風俗習慣を尊重する、④常にモンゴル人の自覚を持ち、政府への忠心を忘れない、⑤日本とモンゴルの親善に努力する、という内容が見られる〔音尾 1981: 350-351〕。サイチンガのこの体験は後にモンゴルの運命が暗雲に包まれ、政治的混乱に落ちいり、出口の見えない時代に見事に実を結ぶことになる。それは、サイチンガの指導力が時の徳王に認められ、1945年8月にチャハル盟の副盟長に任命され、一ヶ月間あまり公職についたことである。そして同9月にモンゴル国の軍隊に伴ってモンゴル国の首都ウランバートルへの留学を果たした〔チョイロルジャブ 2014: 7〕。1945年8月と言えば、日本は敗戦に伴い、中国大陸から引き上げていた時期である。徳王が描いていた見果てぬ夢もゴビ砂漠で蒸発に向かっていった。モンゴル人の運命にとっては、不吉極まる時勢の成り行きであった。しかしこのような暗転の時代、サイチンガがチャハル盟の副盟長の職に昇任していた事実は、彼の日本体験と切っても切り離すことのでき

ない歴史的にも大きな意義を持つものである。

サイチンガが留学していた当時の日本の文化と社会、日本の近代文学史における巨匠たちの背景をある程度理解しなければならない。例えば、サイチンガが日本へ来た年には中原中也（1907-1937）は他界している。中原中也は詩人であり、歌人であり、作詞家であり、翻訳家でもある。サイチンガもたくさんの歌詞を作り、自分の生徒に教えていた。中原中也の「いのちの声」〔中原中也 1968: 87-90〕という名詩とサイチンガの1941年東京で出版した「まがきに押し潰された青草」という詩の構造と妙趣に共通点が見られる。「まがきに押し潰された青草」は内モンゴルの小学生の教科書にも長年掲載され続け、モンゴル人の口に膾炙されてきた名詩でもある。この詩は反戦、植民地解放、モンゴル民族の苦難、民族の解放と独立を巧みな詩法で詠い、モンゴル人の心に刻み込まれ妙境を極めた詩でもある。

サイチンガはまた優れた翻訳者であった。重病を患いながら、1972年ウジェーヌ・ポティエ（Eugène Pottier, 1816-1887）の革命歌である「インタナショナル」と「造反者」という詩を英語からモンゴル語に翻訳し、モンゴルの若者に国際的な連携の希望と勇気を呼びかけていた。彼のこうした命がけの活動も、詩人たるものは素晴らしい翻訳者でなければならないという日本体験の一側面を示すものである。

サイチンガは北原白秋（1885-1942）や日本近代詩の父である萩原朔太郎（1886-1942）らの詩法と詩想に大いに感銘を受けた詩人でもある。1942年にサイチンガは日本での留学を終え、故郷に錦を飾るという詩夢に燃えてモンゴルの草原に飛び帰った。北原白秋や萩原朔太郎らを相次いで失い、絶頂期を迎えていた日本近代詩の世界も新たな展開を迎えることになった。写真1は、民族衣装に身を包んだあどけない少年時代のサイチンガであり、写真2は、日本の近代思想に染まり、明治の文豪に肖り、文筆業を志す彼の夢の輪郭が透けて見て取れる。このようにサイチンガの日本体験は、近代文化の体験であり、近代政治の体験であり、近代教育の体験であり、また何より近代文学の体験であった。



写真1 少年時代のサイチンガ

## 2 モンゴル文壇における位置づけ

現代モンゴル文壇における教育者、詩人、作家、翻訳家、思想家、内モンゴルの近代文学の基礎者という多彩な顔を持つサイチングの研究は、『サイチング学』として新たな展開を迎えている。彼は各ジャンルの作品に意欲を込め、1939年から1973年まで多くの作品を世に送り出した。その時代の内モンゴルの社会は暗雲漂う政治情勢に支配され、もがいていた。

モンゴル人は長い間清朝の支配に蹂躪され、国土をはじめ多くの文化遺産を失った。その後続く辛亥革命（1911）、中華民国の誕生（1912）、モンゴル人民共和国の誕生（1924）、満洲事変（1931）、満洲国の誕生（1932-1945）、ハルハ河戦

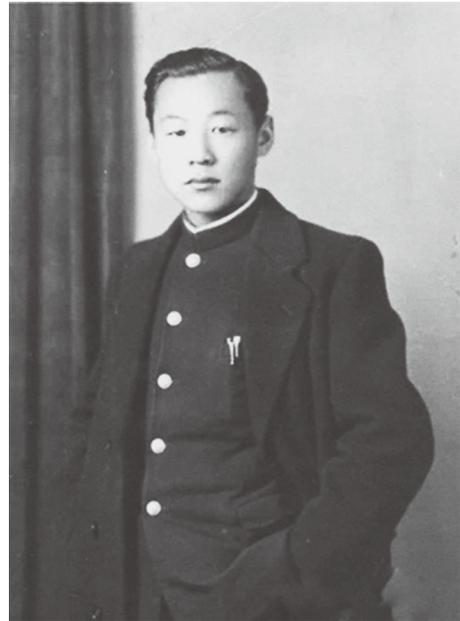


写真2 日本留学時のサイチング

争（1939）、モンゴル聯合自治政府（1939）、ヤルタ協定（1945）、第二次世界大戦（1939-1945）、内モンゴル人民共和国臨時政府（1945）、内モンゴル自治運動連合会（1945）、東モンゴル人民自治政府（1946）、中華人民共和国の誕生（1949）などの歴史舞台における数々の革命と戦争に呑みこまれ、モンゴル人の自由は勿論、領土は侵食され、文化と歴史は瀕死に喘ぎ苦しんでいた時期でもある。こうした時代背景を見越したサイチングは、民族の運命を何より悲観し、自分の作品に、民族の自立、精神の高揚、覚醒の向上を前衛的手法で詠い続けた。日本へ留学したサイチングは日本語を通して日本文学と世界文学を学び、自分の創作の世界に新しい作風を求めた。

サイチングが日本で勉学に勤しんでいる間に書いた作品には、「われわれモンゴル青年たちの自覚」（詩）（1939）、「起きて頑張ろう」（1941）、「曙光」（詩）（1941）、「自然の喜び」（詩）（1941）、「春」（詩）（1941）、「窓」（詩）（1941）などがある。いずれも新しい思想や感性を表出した代表的な作品で、内モンゴルの近代詩の金字塔となった。特に彼の1941年東京で謄写版で出版した『心の友』という詩集は、内モンゴル近代文学史上において最初の詩集である。その詩集にモンゴル語で書かれた32篇の詩が収録されている〔トゥブチュド・バイガル 2014: 1-88〕。内モンゴルの近代を飾る最初の詩集は日本で出版されており、その作者も、日本で近代教育を受けたサイチングであったことの意義は非常に大きいものである。そのため、内モンゴルの

近代文学史及び近代文学の萌芽は日本及び日本の近代文学と深く関係するものである。この詩集は彼の日本の近代思想にインスピレーションを得ての賜物である。

サイチンガは日本での学業を終えて、帰国してから1941年シリングル盟スニト右翼旗に設立された女子家政実験学校に教師として迎えられ、内モンゴルの近代教育に情熱を注いだ。当時内モンゴルでは、戦火の煙がまだ燻っていたため、教科書は勿論、出版社はなく、印刷物も乏しかった。この暗黒の時代を打開するため、日本の近代教育を受けた彼は、『家庭を繁栄に導く書』（1942）という、モンゴル民俗文化を題材にした生徒向けの教材を編集した。また、『教育方法』（1945）という教師向けの教材も編集している。このように、サイチンガは、内モンゴルの近代教育に尽力した方でもある。その傍ら『砂原の故郷』（エッセイ）（1941）、『心の光』（日本語から翻訳した名言集）（1942）、『我がモンゴルの新興の調べ』（手紙形式のエッセイ）（1944）などの多くの作品を公表し、人民の精神生活の向上に努めた。上で取り上げた各作品は彼の代表的な創作品であり、モンゴル文学史においても画期的な作品として高く評価されてきた。

サイチンガは1945年10月から1947年10月までの2年間モンゴル人民共和国に滞在した。この間当時のモンゴル国の新鋭の作家たちと交流を深め、勉強の傍ら、意欲的に詩の創作に勤しんだ。「ウランバートル」、「喜び」、「モンゴルの青年」、「人民の戦い」などの代表的な作品を残した。モンゴル人民共和国で書いた作品群をモンゴルの首都ウランバートルの名で以て『ウランバートル』という詩集を同国で出版した。この詩集も内モンゴルの詩人がモンゴル人民共和国で出版した最初の詩集である。1945年から文化大革命が始まる前の1965年までは、サイチンガの創作活動の黄金時代であると考えられる。というのは、日本とモンゴル国へ留学し、東西の最新の思想、最新の文学に慧眼を開き、多彩なジャンルの作品を生み出し、内モンゴルの近代文学の基礎に貢献したからである。

1999年サイチンガの生誕85周年を記念して、『ナ・サインチョグト全集』（全8巻）が内モンゴル人民出版社より出版された。中国においても少数民族出身作家の最初の全集として内外の注目を集めた。しかし、この全集が出版当初から学者たちの間に、テキストや書簡など資料の点で改定ならびに増補が必要であると指摘されてきた。というのは、この全集には、編集者が原文テキストに勝手に添削、加筆を施したからである。このことに関してバイガルは一例を挙げて、「サイチンガの『砂原の故郷』におけるもとのテキストに、無断な添削をした結果、この作品がサイチンガが書いた『砂原の故郷』ではなく、却って編集者たちの作った『砂原の故郷』になってしまった」〔トゥブチュド・バイガル2014: 82〕と痛烈に批判している。

2014年はサイチンガ生誕100周年にあたる。北京、フフホト、シリンホト及び彼の生地であるショローン・フフ・ホショーにて、国際的学術研究会、祝賀イベント

などが多く行われた。モンゴル国でも関連行事が行われた。特に彼の出身地では新たな記念碑が建てられた。内外から多くの方々が記念碑を訪れ、詩聖の詩魂を慰め手を合わせた。作品論と作家論という様々な角度から研究する学者も増え、今は、サイチング研究は、『サイチング学』として、新たな学問領域を切り開いている。こうした動きは国際的な詩人サイチングを偲び、近代内モンゴル文学の発展に寄与した不動の地位を再評価し、その美しき文学世界を後代に継承させるという善事を示すものである。

### 3 不遇の晩年

詩人サイチングの一生は実に政治に翻弄され、時代に翻弄され、思想に翻弄された波乱万丈の人生でもある。

1966年から中国では未曾有の文化大革命が起こり、中国全土は文化遺産の破壊、文化人の粛清、古き良き伝統の抹消の嵐に呑みこまれた〔楊 2009〕。弾圧と批判の矛先は文化人に向けられた。サイチングの身にも悲劇の暴風雨が降り注ぎ、受難に満ちた晩年が始まった。日本とモンゴル国へ留学し近代教育を受けた名高き詩人であったサイチングは、内モンゴルでは最初に断罪されるべき人物のひとりとなった。そして、「日本のスパイ」、「国家分裂主義者」と断罪され、1967年紅衛兵によって逮捕されたれ、1971年までの5年間、牛舎に監禁され、過酷な拷問を受け、身体的、精神的に迫害を被った。労働改造所にも送られ、思想改良が迫られ、辛らつな経験を味わい、筆舌に尽くし難い屈辱的な拷問を受けた。その間に彼の『邁進するおいらの白搗きの調べ』という100篇あまりの詩からなる詩集の原稿を含め、多くの手稿と初版の作品が散逸された。このことは、内モンゴルの近代文学史は勿論、モンゴル族の文学史においても補うことのできない痛恨の極みとなった。彼は文明世界において例を見ないこの地獄のような時代を詩で以て表現して生き抜いた鬼才の詩人である。

文化大革命の時代、サイチングの作品は「毒草」と批判され、「資本主義のアイディアリズムに基づいて書かれたもので、何も評価する価値はない」と糾弾された。

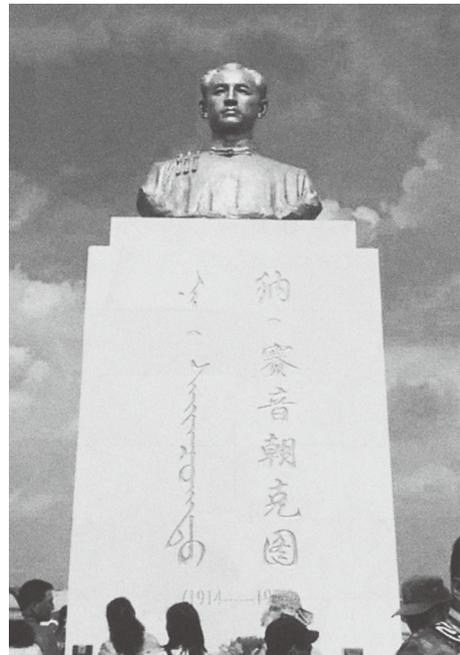


写真3 生誕100周年を記念して立てた記念碑。モンゴル語でナ・サインチョクトと刻んである。

また、「あなたは富士山を賛美してください！富士山は戦争のかがり火だ！誰が敢えて富士山を賛美すれば、彼は死滅に向かうものである」〔トゥブチュド・バイガル 2014: 82〕と批難を浴びせられ完全に否定された。

「富士山は美しい」という一篇の詩は、サイチングの詩人人生にとって最悪の「不吉な詩」となった。この詩を東京で出版した所為で、彼は「日本のスパイ」と断罪され、牛舎に監禁され、労働改造所に送られ、5年間に及ぶ迫害に苦しめられ、満身創痍の最期を迎えた。言葉に魂を込めた夥しい作品を世に送り、内モンゴルの近代文学の基礎を一人で築き上げてきた詩人サイチングが、牛舎に監禁されるまで地獄での人生に向き合っているようだったとき、日本では東京オリンピックがすでに開催されており、川端康成（1899-1972）も1968年日本人作家として初めてノーベル文学賞を受賞し、日本社会と日本文学は発展の絶頂期を迎えていた。アジアの東西における二つの異なる文学世界の展開である。

1973年2月3日、サイチングは上海の病院で闘病生活をしながら歯を食い縛って筆を握り短い詩を書いた。

私はこの体の  
健康を取り戻し  
母なる人民の為に  
有益な仕事をこなし  
彼らに好まれる詩を書けるようになりたい！〔B・ゲレルト 2000: 7-8〕。

この妙句に、詩を以て精神の本質、知の響きをモンゴルの為に改めて伝えたかった情熱が甦ってくる。これは彼のこの世を去る二ヶ月前の最後の詩であり、またこの世に残した最後の言葉でもある。戦前は日本へ留学し、東洋大学で倫理教育を学び、乾ききったモンゴルの文壇に明星の如く現れた天才詩人サイチングは、このようにして自分の詩霊との別れを誓った。内モンゴルの文壇における詩聖サイチングを語る時、心の痛みが極度に達し、筆先が妙に重くなってくるような感じに襲われる。これはサイチングの運命であり、近代内モンゴル文学の運命でもある。

サイチングは無類の迫害を受けながらも詩を書き続けた。「馬のような白き尾根」（1968）という詩は牛舎の中で書いた代表作であり、「金字で書いた賢明な規則」（1970）という詩は兵団の労働改造所で書いた代表作である。過酷な環境での拷問、迫害、労働の末、終に重病を患い、1971年兵団の労働改造所からフフホトに戻る。1973年5月13日、モンゴル文壇における不屈な精神の偉大な詩人サイチングは上海の病院で胃がんのためこの世を去り、59歳の不遇の詩人人生に別れを告げた。

サイチングの生涯は、詩の中で生を受け、詩の中で政治を歩み、詩の中で民族の

運命を悟り、詩の中で死を遂げた純粋な遊牧民の純粋な精神そのものである。モンゴルの暗黒の時代に筆を休むことなくモンゴル語で凜とした逞しい詩を書き続け、言葉に魂をこめ民族の未来に夢を託し、人類の精神の解放の為に心の哲学を詠い続けた詩人である。遊牧民の良心を持つ詩人として全てのモンゴル族に敬慕されるサイチングの詩の世界は、今後も国境を越え、言葉を越え、心を越え多くの方々に語り継がれるものである。彼の悲慘に満ち、悲劇に追い込まれた不遇の晩年は、近代内モンゴルの歴史と文化の運命そのものである。

## おわりに

サイチングの人と作品に対する研究は、現在の中国では中国語とモンゴル語による研究が盛んに行われている。研究成果も蓄積され、相当の研究者を有する学問となり、更なる成熟の領域に向かっている。また日本を始め諸外国でも研究が進められている。サイチングは、内モンゴルの近代史においてもっとも複雑な時期で活躍した知識人の一人だったので、総合的研究と学際的な視点からの詳細な研究が望まれている。サイチングは1937-1942年まで日本へ留学し、当時はアジアで近代文化の繁栄を極めていた日本の先進文化、先進思想を学び、また日本語を通してヨーロッパの先進思想と文学を旺盛に吸収していたことが後のサイチングの文学の素養、思想形成に決定的な布石となった。

またサイチングは1945-1947年までの二年間モンゴル国へ留学し、モンゴル国の作家たちと交流を深め、優れた作品を著し、内モンゴルの文壇における社会主義リアリズムの手法の創始者の地位を固めた。しかし、その時、モンゴル国と内モンゴルを巡る政治空気は危険を極めていたため、彼の思想発展が時代の暗雲に翻弄され、そして多くの作品と未発表の手稿が紛失されていった。彼はモンゴル国にいる間、「ウランバートル」という詩を書いていた。文化大革命が始まると、彼のその詩が「国家分裂主義者」の象徴となり、酷い仕打ちに追い込まれた。しかし、彼のモンゴル国で著した作品の全容、思想形成に関する総合的な研究はまだ見られないことも腑に落ちないところである。

「満洲国成立後、モンゴル人留学生の数は増加していく。それは満洲国において日本への留学生派遣を制度化して推進した結果であった。日本側にも、1934年に教育、医療、牧畜業の向上などモンゴル地域において文化面での耕作活動を行うため、財団法人「善隣協会」が設立された」〔内田2008: 227〕。20世紀当初の内モンゴルの教育の現状は非常に立ち遅れており、近代的知識の獲得、近代的技術の導入のためには、海外へ未来を担う優秀な青年を派遣することがもっとも有力な手段として徳王たちに重視されていた。また、「徳王が推薦し、善隣協会の斡旋で日本に渡った青年

は、1938年以降、続々帰国し、「蒙疆政権」に加わった」〔田中 2001: 125〕。サイチンガも帰国してから興亜院の助成を受けて開校した、西スニト女子家政実現学校に教師として迎えられた。このように、サイチンガの日本へ留学したこと、また留学を終えて帰国したことにも当時の日本と内モンゴルの政治的要素が深く絡み合っていることに留意する必要があるだろう。

日本の首都「東京」、モンゴル国の首都「ウランバートル」などをテーマにした妙趣に富んだ詩篇を書いただけで、文化大革命という激怒の時代には「日本のスパイ」、「モンゴルの分裂主義者」という濡れ衣が着せられ、冤罪を晴らすことなく無念の死を遂げた彼の詩魂は叫び続く。アジアの近代政治史、近代文学史においても稀に見る悲劇の民族詩人サイチンガの肖像を学際的な視点からアプローチし、未だに解決されていない多くの謎を解明することが期待されている。

## 参考文献

音尾秀夫編

1981「留日蒙古学生修養会」『善隣協会史』東京：勁草出版 pp. 350-351（原文『蒙古』99号，1940年）。

内田 孝

2008「『新モンゴル』誌第2号とモンゴル人留学生による文芸活動」『東北アジア研究』第14・15併合，pp. 225-243.

B・ゲレルト

2000「前書き」『ナ・サインチョグト研究論文選集』（上）呼和浩特：内蒙古人民出版社。

賽春嘎

1937「清見寺における生活」『善隣協会調査月報』第66号（音尾秀夫 編 1981『善隣協会史』東京：勁草出版 pp. 119-120 再収録）。

田中 剛

2001「『蒙疆政権』の留学生事業とモンゴル人留学生」『歴史研究』38号，大阪：大阪教育大学歴史学研究室 pp. 99-137.

チョイロルジャブ

2014「サイチンガ（ナ・サインチョグト）の20世紀40年代の事跡に関する新しい資料」『内蒙古大学』43巻6号，pp. 1-9.

トゥブチュド・バイガル

2014「時代の潮流とテキストの運命—サイチンガの『砂原の故郷』の三種のテキストの比較」『中国蒙古学』第42巻6号，pp. 69-83.

トゥブチュド・バイガル編

2014『サイチンガの作品集』呼和浩特：内蒙古人民出版社.

中原中也

1968『中原中也詩集 日本の詩集10』東京：角川書店.

楊海英

2009『墓標なき草原』(上) 東京：岩波書店.